

ルソーの人間関係における金銭の問題をめぐって

著者	三上 純子
著者別表示	Mikami Junko
雑誌名	フランス語フランス文学研究
巻	49
号	1986
ページ	10-19
発行年	1986
URL	http://doi.org/10.24517/00050294

doi: 10.20634/ellf.49.0_10



ルソーの人間関係における金銭の問題をめぐって

三 上 純 子

ルソーは、『告白』第1巻のなかで、徒弟時代の盗みについて触れながら、金銭への嫌悪を以下のように表明している。

Il ne me faut que des plaisirs purs, et l'*argent* les empoisonne tous¹⁾.

Je suis moins tenté de l'*argent* que des choses, parce qu'entre l'*argent* et la possession désirée il y a toujours un intermédiaire, au lieu qu'entre la chose même et sa jouissance il n'y en a point²⁾.

スタロビンスキーの指摘³⁾をまっまでもなく、ここでは、貨幣という抽象的な符号は、主体による欲望の対象の直接的な享受を妨げる障害として捉えられている。

ところで、消費の領域で、このように危険な力を持つとみなされている金銭は、人間関係のなかでは、どのような意味を与えられているのだろうか。この問いを出発点として、本稿では、友情における金の貸し借りの問題について考えてみたい。そして、後半では、より広い意味での物質的な援助に関するルソーの考え方を明らかにしながら、作家がさまざまな戦略によって彼の理想とするコミュニケーションを実現しようとした過程を跡づけてゆきたい。なお、分析に際しては、とくに『告白』のテキストを重視する。

I. 友情と金銭

まず、ルソーにとって、友情とはどのように定義される関係なのだろうか。彼は

1) J.-J. Rousseau, *Les Confessions, Œuvres complètes I*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976 (1959), p. 36. 以下ルソーの作品については、とくに指示しない場合は上記のルソー全集(全5巻中4巻既刊, O.C. と略記)から引用し、繰り返し引く作品については()内に示す略号を用いる。 *Les Confessions* (C.), *Dialogues* (D.), *Emile* (E.), *La Nouvelle Héloïse* (N.H.). また書簡については、*Correspondance complète de Jean-Jacques Rousseau*, éd. R. A. Leigh,

Genève, Institut et Musée Voltaire; Oxford, The Voltaire Foundation at the Taylor Institution, 1965- から引用し, C.C. と略称する。なお引用の綴り字表記は原文のままとし、引用中の言葉の強調はとくに記さないかぎり筆者による。

2) C., p. 38.

3) J. Starobinski, *Jean-Jacques Rousseau, la Transparence et l'Obstacle*, Gallimard, 1971 (1957), p. 132.

『エミール・ファール草稿』の一節で、この問いに答えている¹⁾。ルソーによれば、友情も「契約」の一種である。したがって、自己愛を周囲の人々の上に広げ、他者との関係のなかに自己同一性を求めることが自然であるにしても、主体が他者に振り向ける配慮を、相手から交換の形で返してもらわないかぎり、この間主体関係の発展は、個人の幸福に寄与するものとはなりえない、と彼は主張するのである。このような友情の具体例を、コンディヤック、ディドロ、ルソーの交流を描いた、『告白』第7巻の末尾のテキスト²⁾に見いだすことができよう。無名作家たちは、互いに友達を紹介し合い、社会的な不正に対抗して同盟を形作ってゆく。この関係における、自発的な気持ちの結びつきは、人称代名詞 « nous » の反復や、感情的な響きを持った言い回しの多用³⁾によって強調されている。これと対照的な例が、絶交した友人グリムにたいするルソーの苦情の場合である。要約すると、ルソーはグリムをこう非難している。グリムは、物質的なものであれ、感情的なものであれ、どんな援助も返したためしがなく、とくに、自分は彼をすべての友人、知己の所に連れて行ったが、相手はけっしてその友人を紹介しなかったと⁴⁾。これらの不満は、喧嘩別れした以前の友人への恨みとばかりは受け取れない。偽りの友グリムの像が、先の相互性としての友情という考え方に基づいて構築されているのは明らかであろう。

ところで、ルソーは、友情における交換のなかで、すべての要素に同じ価値を与えていたわけではない。次に引く1757年頃のテキストは、エルミタージュでのブルジョワや裕福な文学者仲間との交際を通じてふくらんでいった作家の悩みを語ったものである。

Pour de l'argent et des services, ils sont toujours prêts; j'ai beau refuser ou mal recevoir, ils ne se rebuttent jamais et m'importunent sans cesse de sollicitations qui me sont insupportables. Je suis accablé des choses dont je ne me soucie point. Les seules qu'ils me refusent sont les seules qui me seroient douces. Un sentiment doux, un tendre épanchement est encore à venir de leur part et l'on diroit qu'ils prodiguent leur fortune et leur tems pour épargner leur cœur⁵⁾.

ここでは、ルソーは友情の本質を内的、感情的価値 (« sentiment doux », « tendre épanchement », « cœur ») に還元し、利害のからんだ物質的な援助 (« argent », « services », « choses », « fortune ») と対立するものとして描いている。質の領域と

1) J.-J. Rousseau, « Emile, Manuscrit Favre », in *Annales de la Société Jean-Jacques Rousseau*, VIII, 1912, p. 284.

2) C., p. 347.

3) 例えば, « se lier avec », « se plaire avec », « tête-à-tête en pic-nic », « se rassembler », « diner ensemble », « petits dinés », « plaire à » など。

4) C., pp. 466-467; pp. 369 et 469 も参照されたい。

5) *Mon Portrait*, O.C. I, p. 1126. 同様の例としては, C.C. IV, n° 592, à Mme d'Houdetot, le 17 décembre 1757, p. 394; V, n° 636, à J.-F. Deluc, le 29 mars 1758, p. 68.

量の領域は、二元論的に分かれたれ、もっぱら質の領域の純粹性に光が当てられているのである。作家自身によるこの原則の実践は、例えば、『告白』のなかで触れられている、友人たちからの遺言状による財産贈与の拒否¹⁾に端的に示されているといえよう。リュクサンブール元帥からの贈与にたいするルソーの態度については後にも述べるが²⁾、一言付け加えるならば、ルソーが元帥からの財産贈与を例外的に受けようと決意するのは、自己の友情のコードへの侵犯によって、この身分違いの友人への並はずれた愛情を表現しようとしたからである。

さて、とはいえ、ルソーは心情的なピューリタニズムという理由によってのみ友人間の金銭の授受の問題に神経質であったわけではない。1757年12月17日付のドゥドト夫人宛ての書簡³⁾で、作家は公然と行なわれる金銭的な奉仕の価値の低さを強調している。そして、「あらゆる種類の犠牲のなかで、お金は与えるのがもっとも簡単で、受け取るのがもっとも難しい犠牲」であるから、この奉仕によって恩を受けたことになるのは、与えられるほうの人間ではなく与えるほうの人間であるという独自の説を唱えている。これは一見したところ尊大とも受け取れる理論であるが、この理論の背後には、独立した個人の間に対等な人間関係へのルソーの希求が潜んでいるのを見落としてはなるまい。！というのも、ルソーは、『コルシカ憲法草案』のなかで、金銭を「分配の不平等によってのみ本当の効果を持つ相対的な符号⁴⁾」と呼んでいる。つまり持てる者と持たざる者との間に差があるからこそ、金銭は支配—被支配の関係を作り出すことができるのだ。そのうえ、与える者が金銭の世論への影響力を利用した場合、富の不平等が、そのまま人間の上下の序列関係として世間に認められる可能性があるわけである。したがって、金銭的な奉仕がルソーの心の琴線に触れるとすれば、彼の作品の出版者レーからテレーズに贈られた年金のように、「見せびらかしもなく、気取りもなく、大騒ぎもせず⁵⁾」に行なわれた場合に限るのだ。友人の金銭的な奉仕は、そのとき初めて自尊心の満足と他者の従属を目指した手段であることをやめ、ありのままの善意として受け取られることになるのである。

II. 『告白』の一テキスト

さて、このように、金銭が自発的な人間関係に持ち込みうる二重性、虚偽性について考えようとするとき、先に言及した、ルソーと友人ディドロとの友情の進展を物語ったテキストの続きが興味深く思われる。

Je lui remis mon manuscrit que j'avois fait mettre au net par un laquais de M. de Francueil appelé Dupont qui écrivoit très bien, et à qui je payai dix

1) C., pp. 56, 619.

2) 18 ページ参照.

3) C.C. IV, n° 592, *op. cit.*, p. 395.

4) *Projet de Constitution pour la Corse*,

O.C. III, p. 921.

5) C., p. 561.

ecus tirés de ma poche qui ne m'ont jamais été remboursés. Diderot m'avait promis de la part des Libraires une rétribution dont il ne m'a jamais reparlé, ni moi à lui¹⁾.

これは、ディドロの依頼に応じて、ルソーが『百科全書』の音楽の項目を書き上げて渡したくだりの説明である。ルソーの書簡全集の校訂者リーは、このテキストに関して、「ルソーは、『告白』のなかで、清書させた人への謝礼(10 エキュ)を返してもらえなかったし、また自分の仕事の報酬が支払われなかったと不平を言っている²⁾」と解釈している。

けれども、先の記述のなかには、単にルソーの旧友にたいする恨みが表現されているだけなのだろうか。確かにこの引用部の前の箇所では、多くの寄稿者のなかでルソーだけが執筆期限を守ったことが明記されており、これはディドロが清書代の件をすっかり忘れてしまったのと鮮やかなコントラストをなしている。また、仲違いした昔の友人たちによる陰謀という強迫観念に苦しめられつつ書かれた『告白』第2部では、ディドロとの蜜月時代を回想したテキストにまで自己弁護の意図が入り込んでいることも否定はできない。

しかしながら、ルソーが、ディドロに支払ってもらえなかった清書代と報酬は二度と催促しなかったと述べる時、彼は次に引く友情の理想を実践していることを証明しようとしたのではないだろうか。

Qu'importe qu'un des deux amis donne ou reçoive, et que les biens communs passent d'une main dans l'autre, on se souvient qu'on s'est aimés et tout est dit, on peut oublier tout le reste³⁾.

なお付け加えれば、この友情のコードについては、ルソーのほうに借りのある場合の例も『告白』に見いだせる。すなわち、『告白』第7巻のヴェネチアのエピソードのなかで、ルソーが、借金の肩代わりをしてくれたカリオにその後何度も会ったにもかかわらず、金を返済しなかったと述べている点である⁴⁾。また、虚構作品では、ジュリーがサン＝プルーとの関係において、同様の考えを実践している。ヴァレー旅行のための旅費をプライドの高い平民出の恋人に受け取らせようと説得するために、ジュリーが依拠するのも、この「財産の共有⁵⁾」の理論なのである。このようにして、友人たちは、他者を従属させる金銭の力をいわば無害にすることができるといえよう。ルソーにとっては友情は飽くまでも水平的な関係であった。したがって、彼は、「擁護者」顔のグリムが押しつける「不幸な者」の役割を引き受けるわけにはいかなかったのである⁶⁾。

1) C., p. 348.

2) « Notes explicatives », in C.C. II, n° 146, p. 114.

3) *Mon Portrait, op. cit.*, p. 1127.

4) C., p. 313.

5) N.H., p. 67.

6) C., p. 466.

III. 水平的関係維持のための戦略

ここで金銭の貸し借りから問題を少し広げて、より一般的な恩義について考察することにしたい。というのも、ルソーは、贈り物をもったり援助を受けたりした際に生じる恩義というものに、強いこだわりを持っていたように思われるからである。

その一つの現われを、感謝という感情と行為が、ルソーの作品のなかで帯びる両義性に求めることができる。一方で、感謝は、感じやすい心のなかに生まれ、開花する「自然な感情¹⁾」である。それは、エミールと家庭教師の場合²⁾や、クラランの共同体におけるように心と心を結ぶ絆となる。しかし、恩義を施した者が恩義を受けた者に一度感謝を強要しはじめると、両者の関係は垂直的なものによってゆく恐れがある。本来「高貴な感情³⁾」であった感謝は、その自発的な起源から離れ、ついには両者の関係が打算的なものに墮してゆくことすらあるのだ。つまり、恩恵を受けたいと思う者は、「恩恵を施してくれる者を新たに獲得するために、計算づくで上辺だけの感謝を示し、必要以上に義理立てする」ようになるのである⁴⁾。このような観点に立つと、『対話』において、「あの方々」が「ジャン=ジャック」の意に反して行なう施しは、彼の品位を貶める効果を持っていることが納得されよう。「陰謀」の世界では、「感謝」*« reconnaissance »* という言葉は、しばしば皮肉なニュアンスを伴って使用されている⁵⁾。

ところで、このような感謝の価値の低下は、忘恩にたいするルソーの寛容な態度に緊密に結びついているのではないだろうか。作家によれば、「計算づくで恩恵を施す者」に、法外な見返りを要求されることによって人は忘恩の徒となるのである⁶⁾。『新エロイズ』において忘恩が批判の対象にされているのは⁷⁾、その場合は交換される奉仕が誠意のこもったものであるからだ。それにたいして、退廃した現実の社会では、ルソーは恩知らずな気持ちをためらうことなく表明している。

[...] tout bienfait exige reconnaissance; et je me sens le cœur *ingrat* par cela seul que la reconnaissance est un devoir⁸⁾.

一般には「忘恩」という言葉は、交換の規則を尊重しない人々にたいする社会的な制裁の響きを持っていると考えられるのだが、ルソーにあっては強制されることへの嫌悪があまりに強いため、この言葉が恩恵を施す人々にたいする非難の色合いを帯びるのである。さらに、ルソーは、あるときは利害よりも愛情を重視する姿勢を示すために、

Ingrat, je ne t'ai point rendu de Service, mais je t'ai aimé, [...] ⁹⁾.

1) *E.*, p. 522.

2) *E.*, p. 639.

3) *E.*, p. 522.

4) *C.C.* IV, n° 592, *op. cit.*, p. 396.

5) 例えば, *Ebauches des Réveries*, *O.C.* I, p. 1168.

6) *E.*, p. 521.

7) 例えば, *N.H.*, p. 325.

8) *Lettres à Malesherbes*, *O.C.* I, p. 1132.

9) *C.C.* IV, n° 493, à Diderot, le 23 ou le 24 mars 1757, p. 195.

と述べ、またあるときは、恩恵を与える者と受け取る者との間の身分の差異に由来する関係の垂直化、硬直化を乗り越えるために、自らの忘恩を口にしている。

Je vous dois un remerciement, Madame la Mareschale, pour le beure que vous m'avez envoyé; mais vous savez bien que je suis de ces *ingrats* qui ne remercient guères¹⁾.

恩恵を与える者と恩恵を受ける者との間の束縛の絆を断ち切ることを目指して、ルソーは、そのうえ、恩恵に適用されるべき原則をいくつか提案する。まず第一に、援助を与える者は、援助を受ける者の自由を尊重し、その同意を得る必要がある。というのも「無理強いなされた贈与はいかなるものでも贈与ではなく、盗みである²⁾」からだ。第二に、ドルバックの化学の本の翻訳出版に際して受け取ることになった収入に関して述べられた、「恩恵の順めぐり」という考え方がある。ルソーによれば、「裕福で誠実な男の貧しく誠実な男」にたいする恩恵は、個人的な貸しではなく、「人類にたいする貸し」である。したがって恩義を受けた者が、自分なりのやり方で「恩恵の順めぐり」に参加しようと努力するならば、彼は恩人にたいしては、もう借りはないと見なされるのである³⁾。最後に、ルソーは、恩恵を受けた者の恩人にたいする沈黙の感謝の正当性を主張している⁴⁾。この無言の感謝によって、恩恵を受ける者のみならず、恩恵を与える者も計算ずくの行動から自由になるという点を見落としてはなるまい。繰り返し口に出された感謝の言葉のせいで、好意からの援助が、果たすべき義務と感じられるようになったら、恩恵を与える者も自然な喜びを味わうことができなくなるからである。

VI. 沈黙の言語と真正な関係

さて、先に、金銭の貸し借りについて興味深い沈黙の例を見たのであるが、ルソーは、他者との自発的で平等な関係を実現するために、感謝をめぐっても、沈黙の言語を重視しているように思われる。

ディドロとルソーの交友を描いた『告白』のテキストに再度戻ってみよう。『告白』第7巻の末尾に、もう一つの沈黙の例が見いだせる。すなわち、ディドロが『盲人書簡』の唯物論的な思想が原因でヴァンセンヌの監獄に入れられたとき、ルソーが友人の釈放要請のためにポンパドゥール夫人宛てに書いた手紙にまつわる沈黙である。

Au reste si ma lettre a produit peu d'effet je ne m'en suis pas, non plus, beaucoup fait valoir; car je n'en parlai qu'à très peu de gens, et jamais à Diderot lui-même⁵⁾.

1) C.C. VIII, n° 1294, à Mme de Luxembourg, le 16 février 1761, p. 107.
同様の例としては、C.C. VI, n° 808, à Mme de Luxembourg, le 6 mai 1759, p. 89.

2) D., p. 746.

3) C.C. IV, n° 592, *op. cit.*, p. 396.

4) *Les Réveries du Promeneur solitaire*, O.C. I, pp. 1053-1054.

5) C., p. 348.

ジャン・ゲノーは、この一節を、読者にたいするルソーの自己弁護と解釈している¹⁾。しかしながら、ここでもう一步進めて、作家は、この自己弁護のなかで、慎み深い沈黙によって自分の誠実な友情を証明しようとしていたのではないかと考えることもできよう。『エミール』のなかで、ルソーは家庭教師にたいし、生徒に自分の親切をひけらかさず、生徒が独りでそのありがたみを悟って教師に友情を抱くようになる時期を待つことを勧めている²⁾。友人に自分のした奉仕について話せば相手は借りができたと感じる。そして、この負債の感覚が、相互的な自発性の上に成り立っている友情という透明な世界に、虚偽と不誠実とを導き入れるのである。

ところで、無言の奉仕が、人間関係において真の感謝の気持ちを育てるとすれば、ルソーの世界では、心からの感謝を表現するのも沈黙なのではあるまいか。次に引用するテキストからは、テレーズの庇護者をもって任ずるようになったルソーが、彼女の内気な感謝の表現に心を動かされる様子が浮かんでくる。

Je la vis sensible à mes soins, et ses regards, animés par la *reconnaissance qu'elle n'osoit exprimer de bouche* n'en devoient que plus pénétrants³⁾.

また、サン＝プルーが、ジュリーと別れた後に、ブザンソンでエドワード卿と過した夜を回想するときに強調されるのは、スタロビンスキーがクラランのイギリス風の朝について指摘したような沈黙によるコミュニケーションの充実であるが⁴⁾、それとともに、サン＝プルーが友への感謝の念をけっして言葉によって伝えはしなかったという事実も見逃してはなるまい⁵⁾。作家自身も、身分の差にもかかわらず友人として交際しようとしていたリュクサンブール元帥夫妻にたいし、同様のやり方で、心の奥底で感じていた感謝の気持ちを表明している。

Vous savez que je ne vous remercie plus de rien, ni vous, Madame, ni Monsieur le Mareschal. Vous meritez l'un et l'autre que *je ne vous dise rien de plus* et que je vous laisse interpreter ce *silence*⁶⁾.

ルソーが、「感謝と友情は自分の心のなかでは両立しえないとつねづね感じていた⁷⁾」ことを考慮に入れるならば、沈黙は、独立を守りながら他者との共感関係を維持してゆくための、彼にとっての唯一の感謝の形式だったといえるのではないだろうか。

1) J. Guéhenno, *Jean-Jacques, Histoire d'une Conscience*, Gallimard, 1977 (1962), T.I, p. 203.

2) *E.*, p. 522.

3) *C.*, p. 330.

4) J. Starobinski, *Jean-Jacques Rousseau, la Transparence et l'Obstacle*, *op. cit.*,

pp. 183-184.

5) *N.H.*, p. 558.

6) *C.C.* VII, n° 948, à Mme de Luxembourg, le 5 mars 1760, p. 47.

7) *C.C.* II, n° 177, à Mme de Créqui, été 1752?, p. 191.

V. 親子関係的友情

さて、このように、金銭を初めとした貸し借りについてのルソーのこだわりに着目すると、作家が、男同士の友情の一つの理想の形を、年少の者の甘えを許容する依存関係に求めようとしていたこともうなずけるのである。

この種の友情は、主な虚構作品のなかでは、『新エロイズ』のサン＝ブルーとエドワード卿、およびヴォルマルとの間に、また『エミール』のエミールと教師との間に育ってゆくと考えられる。そして、そこでは、年上の友人の役割が「友」(ami), 「保護者」(protecteur), 「恩人」(bienfaiteur) といった一連の呼び名によって表わされる傾向がある¹⁾。とくに注目したいのは、この畳み掛けるような表現の終わりに、しばしば「父」(père)という言葉が来ることである。これは、もちろん愛情の高まりを示しているとも取れようが、はたしてそれだけの意味しか持っていないのだろうか。ここで、父権に関する『人間不平等起源論』の一節を参照してみるのには、無駄なことではあるまい。ルソーによれば、父権とは、父親の利益のためよりも子供の利益のために行使される権利である。そのうえ、成長した後も、息子は敬意をもって父の恩に報いるべきであるにせよ、父親のほうには息子にたいし、感謝による服従を要求する権利はないというのである²⁾。したがって若者とその導き手との友情が、「父」という呼び名によって自然感情の上に基礎づけられたとき、被保護者は、初めて父親にたいする息子のようになり、与えられる者の立場を、いわば合法的に受け容れられるようになるといえよう。

ルソー自身の青年期の書簡のなかにも、年上の同性の保護者たちとの親子的な関係を見つけ出すことができる³⁾。リーは、こうした相手を「養父」と呼んでいるが⁴⁾、このルソーの養父願望は、晩年のキース卿との友情のなかでもっとも理想的な形で満たされたように思われる。それは、この関係においては、想像上の作品に見られたと同様の呼びかけ語が使われていることにも窺える。

[...] j'ai trouvé un homme. Ame noble et grande! ô George Keith! mon protecteur, mon ami, mon père⁵⁾!

性格的な一致、卿の父親のような心遣い、そして26歳の年齢差が、ルソーを屈辱感なしにこの賢者の親切に身を委ねるような気持ちにしたのではないだろうか。こうして父親と息子との間の愛情関係にも似た世界も、友人間のより深いコミュニケーションを求めたルソーの到達点だったといえるのである。

1) *N.H.*, pp. 209, 396, 611; *E.*, p. 651.

2) *Discours sur l'Origine, et les Fondemens de l'Inégalité parmi les Hommes*, O.C. III, p. 182.

3) *C.C.* I, n° 14, à M. de Bonac, le 3 décembre 1736, p. 43; n° 36, à M. de Mably, (avril 1740), p. 120.

4) « Notes explicatives », in *C.C.* I, n° 14, p. 44.

5) *Lettres écrites de la Montagne*, O.C. III, p. 797. 同様の例は, *C.C.* XXI, n° 3612; XXII, n° 3713; XXVIII, n° 4874; XXXII, n° 5716; XXXIV, n° 6063 にも見られる。

最後に言い添えれば、このタイプの友情は、ディドロやグリムなどのルソーが仲違いした友人たちとの関係には見られない。『告白』の記述によれば、彼らの仲違いの原因は、これらルソーよりも若い友人たちの彼にたいする保護者気取りの態度にあるからだ¹⁾。とりわけ、ルソーは、彼からテレーズ親子を引き離そうとする、この友人たちの計画を非常に悪く解釈している²⁾。『告白』第2部で、*protecteur* という語が2度にわたって「amis protecteurs」の形で軽蔑的に用いられているのも、そのような非難の気持ちを込めてのことである³⁾。さらに、これらの友人たちとの齟齬を扱ったテキストには、否定的な価値を与えられた支配の観念を表わす動詞が散見し⁴⁾、彼らとの決裂にいたっては、自由を闘い取った者に特有の一種の誇りとともに報告されている。

[...] j'avois secoué le joug de mes tirans, [...] ⁵⁾.

対等な友情を求めるこのようなルソーの立場は、モンモランシーでのリュクサンブール元帥夫妻との交際を通じて、基本的には変わっているようには思われぬ。『告白』第10巻で、彼らとの付き合いを回顧しながら、ルソーは喧嘩別れしたばかりの友人たちの干渉癖に対比して、彼の自由と独立を尊重してくれた夫妻の配慮を強調している⁶⁾。ただし、リュクサンブール元帥との友情においては、時折、親子的な気持ちの動きも顔を覗かせることがある。例えば、コーム修道士による作家の手術に立ち会うこの貴族の姿は、かなり父性的に描かれているといえよう⁷⁾。また、ルソーはコンチ公からの狩の獲物の贈り物を断わるために書いた手紙のなかで、自分がリュクサンブール元帥の獲物を例外的に受け取った理由を以下のように説明している。

[...] *je suis à lui, il peut disposer comme il lui plait de son bien*⁸⁾.

この帰属意識に息子的な心理を読み取ることは容易であろう。

では、キース卿との友情の場合はどうなのだろうか。ここでも、ルソーは、この友人のリベラルな人柄を描くのを忘れてはいない⁹⁾。だが、この場合には、先に示したように、「*protecteur*」、または「*bienfaiteur*¹⁰⁾」という語彙が明示的に、そして肯定的に使われているのである。ちなみにこの2語はリュクサンブール元帥にたいしては使われていない。この違いの一つの理由は、1762年の『エミール』にたいする有罪宣告に始まった作家の逃亡生活にあるのではないだろうか。というのも、ルソーの不屈

1) 例えば, C., pp. 455-456.

2) C., pp. 381-382.

3) C., pp. 503, 520.

4) 例えば, « mener » (C., pp. 362, 369), « subjuguer » (C., p. 362), « s'asservir » (C., p. 503).

5) C., p. 503.

6) C., p. 520.

7) C., pp. 571-572.

8) C.C. VII, n° 1116, à Mme de Boufflers, le 7 octobre 1760, p. 251.

9) C., p. 597.

10) C., p. 56. *op. cit.*

の共和主義精神にもかかわらず、彼は行く先々で保護を求めざるをえなくなったのだから¹⁾。したがって、キース卿との親子的友情の実現については、先に指摘した感情的な交流に加えて、作家の人間関係の歴史的、環境的な変化を無視することはできないのである。

VI. 結びに代えて

さて、晩年の作家の強迫観念が読み取れる作品『対話』については、すでに分析の過程でも触れてきたが、小論を終えるにあたって、その陰謀の性格に関して一言付け加えたい。なぜなら、ここには、ルソーが主観的なコミュニケーションの理想を生きたにもかかわらず、あるいはむしろ生きたからこそ生じた外部の世界との葛藤がよく現われていると思うからである。この作品では、「ジャン=ジャック」にたいする陰謀の主謀者とされる「あの方々」は、自分たちの行為を彼に恩恵を与える目的のものと説明している。「フランス人」が彼を「忘恩の怪物」と呼ぶのもそのためである²⁾。また、ここでは、恩恵、慈善の語彙(例えば、「bienfait」、「charité」、「aumône」、「bienfaisance」、「bienveillance」など)が、多くの場合、その本当の意味を否定する文脈のなかで、皮肉を込めて用いられている。『対話』に描かれた逆ユートピアは、支配—被支配の関係を拒み、人格相互の自由と独立の尊重の上に、他者との交流関係を築こうとした作家が支払わざるをえなかった代償の大きさを物語っているといえよう。自虐的なまでのルソーの真正なコミュニケーションの追求が、時としてイモラリスムの形をとること自体に、モラルの起源を見る思いがする。

(立教女学院短期大学非常勤講師)

1) 逃亡生活の始まりによるルソーの言語の変化については、1762年6月20日付のイヴェルダンの大法官ジャンジャン氏宛ての書簡に現われる表現も注目ししよう。ルソーは、この手紙の終わりで、「閣下のきわめてつ

つましく従順な僕」という、彼が自己革命以来、貴族との文通でも使うのを避けてきた言い回しを用いているのである (C.C. XI, n° 1894, p. 120).

2) D., p. 710.